

αMプロジェクト2025-2026

立ち止まり振り返る、そして前を向く

Stop, Look Back, Face Forward.

vol. 2 河口龍夫、今井祝雄、植松奎二 | 1970年代

Tatsuo Kawaguchi, Norio Imai, Keiji Uematsu: 1970s

ゲストキュレーター:大槻晃実(芦屋市立美術博物館)

2025年7月19日(土)–9月20日(土) [夏期休廊:8月10日(日)–25日(月)]

12:30–19:00 日月祝休 入場無料

助成:公益財団法人 花王芸術・科学財団

協力:相澤和広、藤本由紀夫

ARTCOURT Gallery、Gallery Nomart、YOKOTA TOKYO、Yumiko Chiba Associates

アーティストトーク

○7月19日(土) 15:00–17:00 「あの70年代、関西」

「あの70年代、関西」今井祝雄、植松奎二、大槻晃実

*トーク終了後、展示会場にて植松氏によるパフォーマンスが行われます

○8月30日(土) 15:00–17:00

「60年代のグループ〈位〉と70年代の自作を語る」河口龍夫、大槻晃実

関連展示

8月30日(土)、9月2日(火)、3日(水)「映像／1970年代」



会場:gallery αM

武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4

確固たる意思がそこにある。／ 河口龍夫、今井祝雄、植松奎二の現在 大槻晃実

現在の美術の時間を再考するために、立ち止まり振り返りたい。

60年代の学園紛争を起点に展開した vol. 1 の次は、1970年代に若者として関西に過ごした、「関係」を主要なコンセプトとして仕事を続ける河口龍夫（1940年-）、日常へささやかな異和を差しはさむことで社会の在り方を探る今井祝雄（1946年-）、世界を構成する要素とその相互関係に深い関心を寄せる植松奎二（1947年-）を結びつけるキーワード「京都アンデパンダン展」と「共同行為」を軸に1970年代の作品を展示する。

本展を懐古的な視点で見たいのではない。

彼らの表現を現在の視点から照射することで浮かび上がる、思想と精神性を探ることを目的とする。50年以上にわたって持ち続ける彼らの確固たる意志、その態度を知ることが、美術と共に歩もうと試みる私たちの原動力になると信じて、vol. 2を開催する。

[出品リスト]

1. 河口龍夫《関係》1970年、コピー・紙、作家蔵
「1970 京都アンデパンダン展」京都市美術館、1970年
2. 河口龍夫《関係—電流》1972-1975年、銅・電気、作家蔵
個展、ピナール画廊、東京、1972年
3. 植松奎二《水平の場》《垂直の場》《直角の場》1973年、写真、作家蔵
「1973 京都アンデパンダン展」京都市美術館、1973年
4. 植松奎二《在 / Situation-Cloth-Triangle》1975 / 2025年、石・綿布 作家蔵
河口龍夫・植松奎二「2人の現代作家と南蛮美術館」南蛮美術館、神戸、1975年
5. 河口龍夫、植松奎二、村岡三郎《映像の映像—見ること》1973年、映像、作家蔵
NHK『兵庫の時間』で放映
6. 今井祝雄《ウォーキング・イベント—曲がり角の風景より》1977年、写真・地図・資料、作家蔵
「1977 京都アンデパンダン展」京都市美術館、1977年
7. 今井祝雄、倉貫徹、村岡三郎《この偶然の共同行為を一つの事件として……》1972 / 2025年、心臓音+トランペットスピーカー+オシロスコープ各3 ※再演
「この偶然の共同行為を一つの事件として……」（御堂筋、大阪、1972年）
8. 「映像／1970年代」と題して、彼らの映像作品を3日間上映する。
8月30日（土）、9月2日（火）、3日（水）。※詳細はウェブサイト、SNS等を参照

河川龍夫、今井祝雄、植松奎二 | 1970 年代

〈存在〉を意識することによって
 〈存在〉と〈存在の認識〉との隔りを明確にすること あるいは
 その隔りをなくすため 〈存在の認識〉を消去すること そして
 〈存在そのもの〉を〈存在〉させること

河川龍夫

中原佑介、峯村敏明編『第 10 回日本国際美術展——人間と物質』毎日新聞社、日本国際美術振興会、1970 年。

—

さて街の騒音と心臓音を等価として、美術館や画廊などの特殊な場ではない、まったくの日常空間のなかに、果たして偶然の通行人にこのイベントがいかに関わっていったか。

行きずりの通行人の耳に侵入した、この二つの異質な“音”の出会い。それが美術家なる人種の仕組んだことなど、通行人にとってはその“音”以上のなんの意味も持たないだろう。そして今回、“美術”や、“芸術”という言葉は一切使わなかったことも、通行人にとっては幸い(?)であっただろう。なぜなら、“美術”といったとき、“美術”に関係のない人たちにとっては、それは一つの呪縛でしかないからである。

今井祝雄

今井祝雄、倉貫徹、村岡三郎「雑踏のなかで心臓音ドクドク」『美術手帖』1972 年 10 月号(通巻 359 号)、12 頁。

—

みえる構造・存在・関係をあらわにみえるようにすること。
 みえない構造・存在・関係をみえるようにすること。
 みえる構造・存在・関係をみえなくすること。
 この 3 つの合い矛盾するみえない、みえるということで
 人間の理解を拒絶する世界(宇宙を含んだ)と、
 いま、いかにかかわっていくかということ。

植松奎二

『1972 京都ビエンナーレ』京都市美術館、1972 年。

河口龍夫 Tatuso Kawaguchi

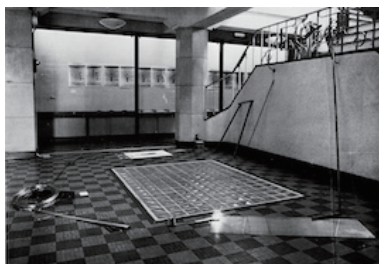
1940年兵庫県生まれ。1962年多摩美術大学絵画科卒業。1965年グループ〈位〉を結成。「第10回日本国際美術展(東京ビエンナーレ「人間と物質」)」(1970年)や「第8回パリ青年ビエンナーレ」(1973年)、「第12回サンパウロ・ビエンナーレ」(1973年)、「大地の魔術師たち」展(1989年)に出品。国内各地の美術館でも個展の開催やグループ展の参加など発表が続き、2007年には名古屋市美術館と兵庫県立美術館で同時期に個展が開催された。「見えるもの」「見えないもの」の関係を問うとともに、鉄・銅・鉛といった金属、光や熱などのエネルギー、土、水、空気、化石や貝、植物、蜜蝋、書物などの物質を用いて、モノの本質に向き合い「関係」をテーマとしたコンセプチュアルな作品を制作している。

今井祝雄 Norio Imai

1946年大阪府生まれ。1964年、大阪市立工芸高等学校美術科在学中にヌーヌ画廊(大阪)で初個展「17歳の証言」展を開催、同年「第14回具体美術展」に出品。翌年、具体美術協会(具体)の会員となる。1966年に「第10回シェル美術賞」で一等賞を受賞、同年にグタイピナコテカで個展を開催。白一色で塗られた絵画や立体作品、モーターを利用した作品を「具体」で発表する一方、「第1回草月実験映画祭」(1967年)や「現代の空間'68—光と環境」(1968年)では映像や光による作品を発表するなど、「具体」の新時代を担うメンバーの一人として、「具体」が解散する1972年まで会員として活動した。「具体」解散以降は、写真や映像、音などのメディアを用いた作品を数多く制作している。

植松奎二 Keiji Uematsu

1947年兵庫県生まれ。1969年神戸大学教育学部美術科卒業。同年、ギャラリー16(京都)で初個展。1974年神戸市文化奨励賞受賞。翌年、当時の西ドイツに渡る。1976年ストックホルム近代美術館にて海外で初めての個展が開催された。1988年「第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ」日本代表に選出。1990年「第12回神戸須磨離宮公園現代彫刻展」大賞受賞。石、木、布、鉄、ガラスなどを用いたインスタレーションのほか、彫刻、写真、映像、パフォーマンスなどにより、重力・張力・引力といった見えない力の法則から、世界の構造・存在・関係をよりあらわにしてきた。自身の身体を用いた空間の存在把握や、人と物体との関係性などを知覚させる作品を数多く発表している。



河口龍夫
《関係—電流》
1972-1975年



今井祝雄
《この偶然の共同行為を一つの事件として……》
1972年(今井祝雄、倉貫徹、村岡三郎)
撮影:夏谷英雄



植松奎二
《截接—Cutting》
1971/1975年

立ち止まり振り返る、そして前を向く 大槻晃実(芦屋市立美術博物館)

この場所で私に何ができるのだろうか。最初に考えたのはそのことだった。私は公立美術館で学芸員として働いている。だが、指定管理者が運営する美術館であるため、公務員ではなく会社員だ。コレクションが健康な状態で受け継がれ、これから先も美術館が存続していくという未来は、決して当たり前のことではない。大切にしていけるべきこと、守らなければならないことには多様な視点や局面があり、それがちぐはぐに組み合わさった居心地の悪さが常に同居している。

そんな学芸員が、このαMという場所とどう向き合えばよいのだろうか。各地の美術館が様々な事情を抱え、困難に直面している。それは今もこれからも変わらないだろう。しかし、たとえどのような運営形態であっても、誰が運営者であっても、美術館にはかけがえのないものがある。それは、その美術館の歴史に寄り添いコレクションから刺激を受けながら展覧会を企画してきた歴代の学芸員や、地域や行政との間で試行錯誤しながら運営に関わってきた職員が経験を蓄積してきた場所であり、観客が作品と出会って思いを深めた展示室という場所だ。

30年以上にわたって時代の先端を敏感に察知して活動してきたこのαMという場所では、作家がいて作品があり、鑑賞者が集い、対話や議論が重ねられる日々が続いてきたことだろう。そんな場所の過去と現在を往来しつつ、作品との対話の中から鑑賞者が自ら問いを立てて答えを探るような、そしてそれを皆で共有できるような場を作りたいと思う。参加してくれる作家たちと議論を重ねながら、歴史と今この時の美術を同じ次元でとらえることで、「美術のための場所」のことを皆で共に考えていく2年間にしたい。自ら考えるという行為を続けることこそが、この社会で美術を健全に存在させていくためには不可欠であるはずだから。

大槻晃実 Akimi Otsuki

芦屋市立美術博物館学芸員。専門は近現代美術。企画した主な展覧会に「今井祝雄—長い未来をひきつれて」（2024年）、「art resonance vol. 01 時代の解凍」（2023年）、「限らない世界／村上三郎」（2021年）、「植松奎二 みえないものへ、触れる方法—直観」（2021年）、「芦屋の時間 大コレクション展」（2020年）、「美術と音楽の9日間 rooms」（2020年）、「art trip vol.03 in number, new world / 四海の数」（2019年）、「小杉武久 音楽のピクニック」（2017年）などがある。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせください。■

gallery αM ギャラリーアルファエム

e-mail: alpham@musabi.ac.jp / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 連携共創チーム(ギャラリー不在時)

tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087